

『ジョナサン・ワイルド』について (2)

飯 沼 馨

3

つぎに私は、さきに跡づけた「偉大さ」に対するフィールディングのさまざまな観念が、ワイルドの性格と行動のうちにどんなふう具象化されているか、また、彼と、善良さの具現であるハートフリーとが、二人の葛藤を中心に、どのように対照的に描出されているか、さらに、ワイルドを中心とする邪悪な世界が、ハートフリーを中心とする愛情と親和の善良な世界と、いかに対比的に描かれているかを追ってみたいのであるが、その前に、一、二ふれておきたいことがある。

まず、この小説は、ハートフリーとワイルドの葛藤を通して、また、ハートフリーの住む世界とワイルドの住む世界——ウイルコックス (M. P. Willcocks) の言葉を用いれば、「鳩たちと蛇ども」の世界^④——の対照的描写を通して、悪の世界の実態の暴露と、善良な人間が迫害されるという現実社会の不合理なひずみの剔出をねらう諷刺小説であるがゆえに、この物語においては、諷刺はここに集中され、『ジョゼフ・アンドルーズ』の道中記的部分にみられるような、世相に対する広い軽妙な社会的諷刺は、見当らない。もちろん、この小説にも、ハ

ートフリーが破産に頻してスナップ家に拘束される場合の隣人や友人や、彼に借金している連中の冷淡さ(ii. 7)、賭博中バグショットのポケットから金をくすねるスナップ氏の助手と、それをかばうスナップ氏(i. 13)や、ワイルドから金を貰って伯爵の保釈の許可をとってやるワイルドの父(ii. 2)などに示めされる警吏の墮落や腐敗、ハートフリーを捕えに來て子供に手荒い真似をする警吏の冷酷と乱暴さ(iii. 12)、ハートフリーが刑場に赴く際、駈けつけた夫人と話しをするのを許すのにフレンドリから金を取り、さらに、死刑延期の令状がとどいたのに、それを隠しておいて、時間延長のための謝礼金の支払いをフレンドリに約束させる役人の狡猾さ(iv. 6)、「聖書のどこにも、いけないとは書いてないから」と云ってワイルドとポンス酒をくみかわす、酒飲みの教誨師の佻字ぶり(iv. 13)、このようなことをフィールディングは、中心的な話の途中で、輕妙に暴露してはいる。しかし、それらは僅かであり、かえって、これが、中心的物語から読者の目をそらさず、この物語を——ハートフリー夫人の冒險談は別として——引き締めることになって、この小説を小規模ではあるが迫力のあるものにするのに役立っている。サザランド(James Sutherland)は、『ジョナサン・ワイルド』は「イギリス最初の純諷刺的小説と見なされうる」と云っているが、たしかに、これは、イギリス最初の諷刺小説であるばかりでなく、小さくはあるが圧倒的な力を持つ、最もすぐれた諷刺小説の一つと云えよう。「この本は短いが、その衝撃は、屠殺者の肉切り庖丁の一撃に似ている」と云ったのは、エリザベス・ジェンキンズ(Elizabeth Jenkins)であった。^④

つぎに、主人公ワイルドの創造に當って、フィールディングが、すでに記したように、「序文」のなかで、「私の物語は、彼『ワイルド』が実際に起こった行為よりも、むしろ、彼がおこなったかもしれない、あるいは、おこなったであろう、あるいは、当然おこなうべきであった行為の物語であって、実際には、ワイルドという名の人物その人と同様、このような他のいかなる、偉大な人間にも、ひとしくあてはまるかもしれない」と記している

言葉を想起しよう。この言葉こそ、真のリアリズムというものが、どういふものであるかをわれわれに見事に示してくれる。彼が十八世紀に、すでに、かかる人物創造の本質をついた言葉を記しているということは、驚嘆に価する。リアリストは、彼のモデルの雑多な性質のなから最も本質的なものを抽出し、彼の想像力によってそれを誇張したり、強化したり、さらにそれに附加したりすることによって、彼のモデルよりも一層完全な、真实性にとんだ人物を創造する^⑩。それは、架空のワイルドでありながら、実際には、実在のワイルドよりも、一層、真に迫った、完全なワイルドとなり、個性と普遍性を持つ典型的人物に昇華する。この人物が、単なる抽象でなく、血肉をそなえた一個の生きた個性的人間として描き出されているとき、その人物は完全なものとなる。フィールディングがこの小説で創造したワイルドは、ワイルドやウォルポールの特質をも具えた、普遍的な、「偉大な人間」の典型にまで高められている。フィールディングはさらに、彼に「偉大さ」ばかりでなく、実在のワイルドも持っていた人間的弱点を、いろいろと附加することによって、彼を観念的な抽象的人物ではなく、生きた一個の人間として描き出すのに成功している。シェイクスピアは悪の典型としてイアゴウ (Iago) という人物を見事に創造しえた。ワイルドは彼とはちょっと異った意味での偉大な人間の典型であるが、その多くの人間的弱点ゆえに、きわめて人間臭い、われわれに身近かな存在となっている。彼の弱点などについては、あとでふれるが、さきに記したフィールディングの人物創造の理念がはつきりと見てとれる個所がある。ワイルドが絞首刑に処せられんとするとき、群集の中には、石やレンガや泥などを投げつけるものがあり、それらが教誨師にもぶつかったりするので、教誨師は、大いそぎで祈禱をすませ、あつというまに事を終えて貨馬車の中に逃げこむのであるが、フィールディングは次のように書いている。

教誨師が、せわしく祈禱を絶叫しているあいだに、ワイルドは彼の身に降りそそぐ石などの雨のさなかで、彼の手をこの牧師のポケットにあてがって、彼の栓抜きをすり取り、それを握って、あの世へ赴いた。（第四卷第十四章）

いかにもワイルドに相応しい最後である。おそらくこんな事実はなかったであろうが、これは、ワイルドならば、「おこなったかもしれぬ、あるいは、おこなったであろう、あるいは、当然おこなうべきであった」行為であって、最後まで偉大さを完全に発揮しつつこの世を去ったワイルドの、まことに立派とも云っていい姿を、ヒューモラスに、しかも、実に見事に描き出している場面である。ワイルドの性格をリアルに描き出していると同時に、栓抜きをすり取った、という記述によって、この教誨師がどんな人間かをも、あわせて暴露している点に、われわれは注目してもよい。一つの事件を中心に、数人の者の性格を同時に剔出するのは、フィールディングの巧妙な描写の特質の一つであるから。

このような真の意味におけるリアリズムにみちた描写と記述から、この諷刺小説は成り立っているのである。

4

さて次に、さきに述べたように、ワイルドとハートフリー、および彼らの世界の住人たちを、フィールディングが、どのように描き出しているかを検討してみたい。フィールディングの作品は、人物や事件が精巧な歯車のように複雑に噛みあっているから、最初から筋を追って跡づけてみるのがよいだろう。

まず主人公のワイルドであるが、盗人を輩出した彼の祖先についての、例のヒューモラスな記述ははぶくとして、フィールディングは、彼の母親について、彼女がワイルドを身ごもっていたときに、目に入ったものは何でもはしがり、その

欲望を人知れず満たさなければ満足できず、しかも、このとき指先に驚くべき粘着力を与えられて、彼女の指先にふれる一切のものが、トリモチにくっつくようにびたりとひついた、というような、ワイルドの性格を示唆する諸譚にみちた記述をおこなっている。ワイルド自身は、幼少の頃、子供には最も発音しにくい *th* という字を、まず最初にらくらくと発音したし (*th* は *th* の頭文字である)、物を貰うと相手の云うことをきき、賄賂をおくられると、なんでも承知するので、はやくから偉大な人間に生れついていると人びとに云われる。そして学校に上ると、果物どろぼうをするような時には、彼は計画は立てるが仕事には加わらず、獲物の保管係をつとめ、そのわずかを、気前よく、仲間に分けてやる。しかし、ワイルドの協力を求めず自分一人でやる者があれば、彼は容赦なく先生に密告する。そして、練習問題などやるときには、それを学友から盗みとるのにたけていたし、古典作品の、身代金を取ったり、掠奪したり、人を欺したりする個所に大いに興味を示し、アレクザンダー大王や故スエーデン王を尊敬していた (*th*)。このように彼は、幼い頃から、将来の片鱗をいかなくのぞかせているのだが、十七歳のとき、大学に偏見を持ち教育を払う彼の父につれられてロンドンに出、債務者を投獄決定まで一時自宅に拘束しておく役目をつとめる警吏スナップ氏(彼はワイルドの親戚に当る)の家に出入するようになる。ここから、彼の「偉大さ」が次第に発揮されることになるのだが、この家に、仕立屋に借金がかかえなくて捕えられたラ・リューズ伯爵が監禁されている。このインチキ・トラップと賭博の名手である伯爵と、彼がいくら勝ってもそのポケットから金を抜き取ってしまうワイルドとは、それがバレても、互に才能を認めあい、二人は親交を結ぶ。スナップ氏には、この伯爵と密通しているシードウシアと、ゆくゆくはワイルドと夫婦になるものと思われるリテイシアという二人の美しい娘がいる (*th*)。伯爵はワイルドの才能をおしみ、上流社会に紹介してやろうと云うが、自尊心の強いワイルドは、「上流社会の末席より、下層社会の上席」、「楽園の丘のふもとにいるより、こやしの山のとっぺん」にいたい、「人びとを上流社会のかしらにつかせるのも、下層社会のかしらに引きあげるのも、同じ才能、同じ働きである」、政治家もどろぼうも、同じ天才、同じ資質を持っているのだ、と主張する。そして、話中に寝込んでしまった伯爵のポケットから、三シリングを失敬することを忘れない (*th*)。かねて、この家を脱出したいと考えている伯爵は、

ワイルドのすすめで、女中に賄賂をつかますが女中が、うん、と云わないので、ワイルドは言葉たくみに彼女を欺し、まゐるめこみ、さらに伯爵に賄賂のための金を貸してやって、彼の脱出に手を貸す。もちろん、ワイルドのこの友情は、胸に一物あつてのことである。ワイルドは、今や伯爵の忠告で、立派な服装をし、上流社会にも紹介され、名士として世間で通るようになっていたが(㉞㉟)、父のすすめでアメリカのイギリス植民地に七年間旅行して帰国する(㊱)。

ワイルドが真の偉大さを發揮しはじめるのはここからである。

旅から帰ったワイルドは、伯爵が賭博で大儲けしたのを目撃し、居合わせたバグショットに、(且て伯爵とは、正直とか名譽とか友情とかいう言葉をお互に口にしかけていたにもかかわらず)、伯爵の帰路を襲わせる。伯爵は金品を奪われたうえに、運悪くスナップ氏やワイルドの父(彼は以前繁昌した商人だったが、浪費と賭博で、スナップ氏と同じ名譽ある職についている——この記述は第二巻第一章にある)などに捕えられ、もとのスナップ家につれ戻される。ワイルドは、居酒屋でバグショットと掠奪品を分配するのであるが、バグショットは、金を二つの山に分け、少い方に金の嗅タバコ入れを加え、好きな方をとれとワイルドに云う。ワイルドは、多い山をまず取り、こわい顔をして、その残りの山をお前は一人占めする気か、ときく。バグショットは驚き、俺が全部取ってきたのに半分ずつ分けるのだから苦情を云う筋合いはないじゃないか、と答える。ワイルドはここで、すでに2に引用したように、計画を立てた自分がその雇人の上前をはねるのが、いかに世のならわしにかなっているかを、言葉巧みに説いてきかす。啞然としたバグショットは納得せず激昂してピストルに手をかける。ワイルドは相手が短気な人間だと知って、冗談を云ってみただけだとゴマかすが、なおもバグショットが怒って罵倒するのを聞くと、ワイルドは落ちつき払って、ピカピカ光る短剣をひっこ抜き、勝負をして勝った者が全部取ることにしよう、と云う。それを見て、バグショットが顔色をかえてひるむのを見ると、「人間の感情を発見し、これにつけ込む驚嘆すべきコツを会得している」ワイルドは、彼をかきかかっておどしつけ、結局、全体の3/4を

取ってしまう。このようにワイルドは、「まず、できるだけ多くの分け前を確保し、しかるのち、残余を言葉たくみに奪い取れ」という日頃の処世訓を実行する (1. 8)。

翌朝ワイルドは、「いとも秀で、同時に、いとも心寛き女性」リテイシアを訪ねる決心をし、贈物の好きな彼女に優美な嗅タバコ入れを買いため、彼女を訪ねる。彼女はしどけない、だらしない恰好をしており、胸はただけ、服からは「且ては白き色なりしものが、今では白の正反対の色なる」というローマの詩人オウィッド (Ovid) の言葉のような色の下着がのぞいている。そして、贈物を、はじめは、しとやかに辞退するが、次には受取る。女性に乱暴な振舞いをするときには、一文もかからぬ真面目くさった結婚の口約束をすることになっている礼儀正しいワイルドは、例によって結婚を誓ったあとで、暴力に訴えようとするが、彼女は指先に具えている武器を巧妙に使用して、彼の顔をかきむしる。彼の顔には血がにじみ、そのふくれ上った頬は、腕ぶしの強い教師にぶんなぐられた少年のお尻に似はじめ、彼はもうろくも撃退される (1. 9)。

ワイルドが去ると、「純潔なる」リテイシアは、ワイルドの足音をきいてあわてて隠した伊達男のトム・スマークを押し入れから呼び出す。彼は、婦人たちに人気のあるしゃれ者でいかにもそれに相応しい、しゃれた、はでな服装をしている。「美しき」リテイシアは、ワイルドに拒否した幸福を思う存分、この伊達者に味わわせる (1. 10)。

ワイルドは、このあとで伯爵をたずねる。彼は「友人を掠奪したり裏切ったりしたあとで、その友人と会うのを恥じるような、礼儀作法をわきまえない連中では決してなかった」からである——「わが主人公には真に偉大でないものはない一つなかった」。ワイルドこそ、バグショットに自分を襲わせた張本人であることをつゆ知らぬ伯爵は、彼を抱擁し、ワイルドも情熱をこめて彼を抱く。伯爵は、「将来の偉業にそなえて幾組かのトランプに細工をほどこして」いた所だったが、先の事件を話し、いかに自分が勇敢に防戦したか、嘘をならべるが、そこへ、バグショットが、下宿代を払わず逐電したかどでつかまって、連行されて来、伯爵と同じ部屋に監禁されることになる (1. 11)。バグショットに、ぞっこん参っているリテイシアは彼を階下と呼び出す。バグショットは、身長六フィート、ふくらはぎは太く、肩幅は広く、顔色は血色

がよく、とび色のちぢれた髪の毛をし、つつしみ深く落着いた態度を示し、小ざっぱりしたリンネルをつけていて、伊達男に必要な偉大にして高貴な資質をすべてそなえていたが、その一面、この上もない阿呆で、読み書きもできず、おまけに、一片の廉恥心も正直も善良さも有していない男である。この男がいない間に、伯爵は、ワイルドに、あのバグショットが、どうも自分を襲った犯人らしいから、告訴しようと思う、と語る。自分の犯行のバレルのを恐れたワイルドはそんなはずはない、と彼を弁護し、社会のために告訴するなんていう考えは馬鹿げている、やったとしても冗談でやったんだらうから自分にまかせてくれ、と頼む。そして食事のあと、皆でサイコロ勝負を始めるが(112)、ワイルドは遊びに加わっているスナップ氏の部下——且て軍人であった「謹厳な紳士」——をそそのかし、勝っているバグショットのポケットから金をちょいちょい失敬させる。これに気付いたバグショットは、ここにスリがいる、と叫んだことから、この紳士の名譽を傷けた、傷つけぬの問題となって騒ぎが起る。しかし、ワイルドは、名譽とは「弱虫どもが美德と呼んでいる、善良さや慈悲」のことでも、正直のことでも、試案のことでもなく、名譽とは単なる言葉にすぎぬ、と、とうとうと弁立て、まだ不満を持つバグショットを最後には、どなりつけて、この争いにけりをつけ、この謹厳な紳士の獲物の大半を受取る。スナップ氏がこの紳士の肩を持ったのは、友人のために少々偽証するぐらいはかまわぬ、というのが彼の処世訓だったからである(113)。

このあとでワイルドは、ある地下室酒場に行き、さきに2に記したように、自分の利益のためにできるだけ多くの他人の手を使う者が、一番偉大な人間だ、と推論し、自分も徒党を作って自分一人のために役立たせ、手下には報酬をちょっぴりやり、一番大胆な、俗衆どもの云う一番邪惡な奴を可愛がり、他の奴は、ときどき機会を見て、絞り首にさせてしまおう、そして、社会の利益と保護のために作られている法律を俺一人のために役立たせよう、と決心する。そのためには金を作らねばならぬと考え、賭博場に行くが、あり金を全部すってしまう。それで手先になりそうな紳士を物色し、この男を仲間にして、たっぷり儲けたらしい紳士を襲うが、この紳士は他の者とくんで勝負し、その場で勝った金をあずけてしまったらしく、二シリングしかポケットに持っていない。ワイルドは失望するが(114)、その34にあたる十八ペン

スを取ることは忘れない (ii. 1)。

このような事件につづいて、ワイルドの「偉大さ」が完全に発揮される、ハートフリーからの宝石詐欺事件が生じる。

ワイルドはうかぬ気持で帰ろうとしているとき、かつての学校友達で、その頃の恩義をいまだ忘れないでいる、「善良な(あるいは、愚かな)性質」の持主、ハートフリーに出会う。ハートフリーは現在、ささやかな宝石商をいとなみ、相愛の妻と、二人の幼い娘と、たのしく暮している。彼は朝食にワイルドを誘い、妻に彼を紹介する。ハートフリー夫人は、夫が恩義を感じている旧友に好意を示すが、そんな気持を抱いたことのないワイルドは、これを自分に気があるのだ、と誤解する。そして彼は、「人間の弱点をすばやく見抜く力」を持っていたので、ハートフリーの「善良さ、友情、寛大」といった性格につけこみ、自分が学校時代に彼に与えてやった、いろいろの恩恵を思い出させ、彼に散々恩を寄せた末、近く結婚することになっている紳士を紹介しよう、と申出る。そして、伯爵にハートフリーを欺す計画を打明け、それを実行する準備として、伯爵を自由な身にするにとりかかる (iii. 1)。そのために彼は、「いつでも、おどろくほどうまく装うことのできる」心配そうな顔付をし、バグショットに、お前が伯爵を襲った犯人であることを伯爵が見破って訴えようとしているので、お前に金を返させるから訴えぬようにと説き伏せてやった、と告げる。バグショットがお前も共犯じゃないか、とさかねじをくらわすと、ワイルドは、彼をおどしつけ、その「心臓の強さ、雷のような声、落ちつき払った態度」によって、彼の持っている二十一ギニー半を奪い、寛大にも半ギニーだけ、バグショットに返してやる。そして、この中から、十一ギニーは自分のポケットにおさめ、残りの十ギニーを利用して、自分の父と、同職のもう一人の紳士に、それぞれ二ギニーずつ賄賂を贈り伯爵の釈放を実現させ、さらに正当な手数料として、残りの六ギニーを自分が取り、しかもそれら十ギニー全部をバグショットの負債とする。このような偉大な才能を発揮して彼は、伯爵を保釈させ、ハート

フリーを信用さすために、伯爵を立派な邸に住まわせ、召使や、供廻りと馬車などをあてがう。そうして、ハートフリーを訪ね、伯爵に一番高価で美しい宝石を一揃とどけるよう伝え、伯爵は宝石のことは無智だから、すぎなだけ高価に吹きかけろ、とそそのかす。ハートフリーは、人の弱味につけ込むような真似をすることを軽蔑するが、ワイルドの親切には大いに感謝する。一方、ワイルドは、ハートフリーが決して馬鹿ではないことを知っていたので、見えすいた詐欺にはかかりにくいと感じ、伯爵に智恵を借して、最初は、宝石のうちから一つだけ取り、他のものはことわって、もっと高価なものを持つてくるよう云いつけろ、と云う。こうすれば、受取った宝石の代価を即金で払わなくてもすむし、伯爵が、それを金に代え、それを元手にトランプやサイコロ勝負をやって、できるだけ多くの金を稼ぎ、その金を次に持参する一揃の宝石を受取る時に払ってやれば、疑われずにすむし、残金は掛けにしておける、というわけなのである。ワイルドは、こうして、ハートフリーを確実にだまし、さらに伯爵からこの金を奪おうと計画したのである。「他人をだます道具である自分の手先そのものをもだますという、この二重の方法は、最上級の偉大さであって」、「ほとんど悪魔のしわざ、そのものに近い」と云えるのである。これは、ただちに実行され、伯爵は最初の日に約三百ポンドのダイヤモンド一個を取り、三千ポンドばかりのネックレス、イアリング、一石ダイヤの指環を一週間後に持参するように命じる。その間に、ワイルドは屈強な手下を集める。そして、伯爵と儲けの3/4をワイルドが取る約束をし、のこりの1/4も自分の物にしようと貪婪な決心をする(Five)。伯爵は、例の宝石を売り、その金を元手にして千ポンドにふやし、これをハートフリーに支払い、残金は一カ月以内に払う約束をする。ハートフリーは彼を信用したが、彼の在庫品に、そんな高価なものを持ち合せておらず、これらの宝石類を他の商人から借りてきたので、伯爵に、彼の云う期日に支払われる金の小切手を書いてくれと頼む。伯爵は、現金で千ポンド払い、二千八百ポンドの小切手を渡す。ハートフリーは、こんな顧客を世話してくれたワイルドに熾烈な感謝をよせる。ハートフリーが帰ると、約束通り、ワイルドは伯爵から宝石箱を受取り、分配のため翌朝会う約束をする。ワイルドの部下二名はハートフリーの帰路を襲い、彼を打ち倒して、伯爵から受取った千ポンドを奪う。例により、ワイルドは、説得と、いや、それよりも罵言とおどしによって、その9/10をわが物にする。こうして

「この偉大にして輝やかしい行為」は、ワイルドの驚嘆すべきあざやかな手際によって、うまく終ったので、ワイルドは、リティシアを訪ねるが、途中でお馴染みの、はすっぱなモリー・ストラドル嬢に会い、酒をおごってくれという彼女の頼みで、近所の居酒屋の一室に入る。ワイルドは「純潔なる」リティシアを熱愛していたが、「彼は俗に云う『女の前掛けのひもにしばられる』、一言で云えば、節操堅固という、けちくさい、卑しい、低級な悪徳、あるいは、いわゆる美徳に染められた、低級なめめしい人間ではなかった」。それで、彼女を口説くが承知しないので、彼女の望み通り贈物を贈って、その思いをとげる。そして、口実をもうけて階下に行き、そのまま姿をくらます。その結果、ストラドル嬢が勘定を支払わねばならぬ破目になる。ワイルドがスナップ家に行くと、シードウシア嬢が編物をしているが、リティシアは留守だと断られる。彼女の体をえたいという欲望を押えかねるワイルドは、宝石箱を餌に、彼女を探してきて貰うことを承知させる。実は、リティシアは、二階でバグショットと密会していたのだが、姉に知らされ、下へおりて来る。その間に、ワイルドはハートフリーから奪った九百ポンドの紙幣の入った財布のなくなっているのに気づき、腹を立てて口惜しがる――ストラドル嬢もさるもの、彼が愛撫で夢中になっている間に、それをそと彼からスリ取ってしまったのである。しかしワイルドは、さすがに偉大な人間らしく、「気持、いや、筋肉の完全な統御力」を有していたので、えみをたたえて、彼女を口説き始める。リティシアは、「他の多くの善良な要素のほかに、虚栄、むら気、貪欲という三つのきわめて優勢な情熱」を持ち、「虚栄を満足させるためにスマーク商会を、むら気のために、バグショット商会を用い、そして、わが主人公は、ただ、貪欲を一手に引受ける名誉と幸福を有していた」。そして、彼女は、スマークには浮き浮きと媚態を呈し、バグショットには情愛をこめ奔放に振舞い、ワイルドには冷淡に、よそよそしく接していた。しかし、ワイルドが宝石箱を持っているのを見て、彼女は、乙な素振りを装う。ワイルドは箱をあけて見せるが、宝石類にいくらか知識のある彼女は、それをすぐさまニセ物と見抜き、彼を罵る。実は、伯爵は、ワイルドが約束を破り、宝石類を一人占めするのを恐れ、模造品を入れておいたのである。一杯くわされたことを知って、ワイルドは憤然として宝石箱をなげすて、別れの挨拶もせず、伯爵の住居めざして、ひたばしりにかけつける(三三)。

このあたりは、ハートフリーからの掠奪品を中心に、ワイルドと伯爵、ストラドル嬢、リティシアなど「偉大な人間」たちのあいだのだまし合いと、こすっからさが、まことにヒューモラスな筆致でたくみに描き出されている個所である。

さて、ワイルドが伯爵の住居へ行ってみると、伯爵の姿はなく、すでにドーヴァーへ向って二十マイル以上も進んでいた。さすがのワイルドも、がっかりして、地下室酒場に行き、一文なしなのにボンス酒を注文し、「人間の『偉大さ』なんて、なんとむなしいことだろう」と、おのれの不幸をなげき、「どろぼうが他人のポケットに手を入れているとき、どうして、おのれのポケットが守れようか」と嘆じ、「真に偉大な人間を支えてくれるのは、ただ内心の栄光、偉大な驚嘆すべき仕事をしているという、ひそかな意識のみだ」と思い直し、自分は不幸だが偉大な人間だと考えて満足しようと思分を慰め、例の威嚇の手段で金も払わず、そこを出る(五七)。

一方、リティシアの方も、ワイルドが去ると二階に戻り、自分が下に降りてワイルドと会っているうちに、バグショットが、この監禁中の家から逃亡しているのに気づく。彼女は恋人を失ったばかりでなく、父の激怒にさらされる。ワイルドの方は、悠然としてハートフリーを訪ね、怪我をして寝込んでいる彼を見て、驚きと悲しみを装い、追剥への怒りを表明する。ハートフリーは友の示した深い同情をかえってすまなく思い、ワイルドから受けた恩義を大げさに感謝する。そして一緒に朝食をとり、小切手を盗まれなかったことを喜ぶ。このとき、一人の婦人がハートフリーの店で、五百ポンド紙幣をくずしてくれと頼む。徒弟の持ってきたその紙幣番号を見て、ハートフリーは、それが自分の奪われた紙幣の一枚であるのを知り、ワイルドにその旨をつける。ワイルドは、平静さを失わず、顔色一つかえず、自分が会ってしらべて見ようと言う。もちろん、この婦人は、その紙幣をワイルドからぬき取ったストラドル嬢であった。ワイルドがすり取られた残りの二百ポンド紙幣二枚は、彼女のからだのどこからも発見されなかったが、ワイルドは彼女をおどし、この五百ポンド紙幣は、トマス・フィアスという男から貰ったと云え、と承知させ、治安判事に偽証させる。フィアスは、ハートフリ

ーを襲った部下の一人で、その掠奪品分配の際、ワイルドの虫のいい云い分を中々承知しなかったで、彼は、この男をこの機会に絞首刑にさせてしまおうと考えたのである。ワイルドはフィアスの入れられているニューゲイト監獄をたずね、彼の不幸に同情を示し、自分が手を打って放免させてやる、と安心させ、なん度も礼を云う彼と抱擁しあった末わかれる。こうしておいてワイルドは、これだけではフィアスを有罪にするには不十分だと考え、彼と一緒にハートフリーを襲わせた、もう一人の部下、ジェイムズ・スライに会い、フィアスが逮捕され、スライを告訴しようとしているとのめかし、先手を打って証人となれとそそのかして、フィアスを死刑にさせてしまう (ii. 5)。

こんなふうに、偉大なワイルドは「かかる測りしれぬ鮮やかな手並をもつて」自分の犯行がバレるのをふせぐと同時に、仲間をだまし、互に反目させ、自分の氣にくわぬ男を抹殺するのに見事に成功する。

今やワイルドはかなり多くの徒党を集めていたが、仲間には不和が生じると、巧みな弁舌で、これをただちにおさめる、見事な手腕をも發揮する (ii. 6)。

ハートフリーの方は、伯爵の小切手が不渡りであることから破産にひんし、スナップ氏の家に身柄を拘束され、夫人も心配して奔走するが、誰も力を借してくれる者もなく、互に慰めあうばかりであるが (ii. 7)、ワイルドはハートフリーを訪ね、高飛車に、彼が伯爵を信用した愚を、とうとうと弁舌をふるって責めたて、彼を圧倒して、自分が、伯爵に彼を推薦した責任を非難するすきを与えず、自分が明朝には保釈になるようにしてあげようと夫人を慰め、感謝の涙をながさせたのち、彼女を自宅に送って行く。ワイルドは、最初会ったときから夫人をわが物にしようという欲望を持っていた。「それは、主の日のおつとめがすんだあとで、でっぴりした元氣旺盛な牧師が、あのうまう料理された牛の腰肉や臀肉しちに対してよく抱く、そういう種類の感情に全くほかならないものである。ありがたのお説教を聞かして貰った郷土が、感謝のしるしに、それを彼の前に置くと、彼はそれが大好物ときているので、一目みるなり、彼は自分がそれをむさぼり

食うところを想像するのである。わが主人公の飢えた情熱もこれにおとらぬほど熱烈なものだった。彼はこのうまそうな御馳走を眺めた瞬間から、どういう方法でそれに取りつけるだろうかと心の中で思いつめぐらしていた。しかし、ワイルドは、まずハートフリーの破滅を実現させる方を先におこなうため、この情熱を抑えつけるだけに偉大だった(Fi. 8)。それで、つのる肉欲を押えて夫人を家に送りとどけ、彼女の夫への友情と援助を誓う。ワイルドは、そのあと、地下室酒場へ行くが、彼は真に偉大だったから、リテイシアが事実を発見せぬかと一寸不安に感じただけで、ハートフリーの不幸への同情などに、すこしも悩まされず、仲間と楽しく酒をのむ。そして翌日、夫人を訪ね、破産の宣告をうけぬうちに、彼女の持っている最も高価な宝石類を携えてオランダに逃げることをすすめ、自分は彼女を同地まで安全に送りとどけてから御主人を救けに戻る、これは、御主人も賛成していることだから、と彼女をだまし、夫に別れを告げに行きたいという彼女の言葉もしりぞけ、そんなことをしていたら手遅れになる、とおどし、彼女を説いて二人の子供たちを忠実な召使に託させ、夫人一人をつれて馬車でハリッジに向う。馬車の中で、ワイルドは、宝石類と共に、この美しい女もわが物にできる喜びに胸おどらせ、彼女が夫と子供のことを思つてその輝やかしい目から流す涙も、「ワイルドの食欲をあふる、おいしいソースの役目をするばかりだった」(Fi. 9)。ハリッジから二人はロッテルダム向けの船に乗り、嵐に会うが、「あらゆる恐怖や憐愍の力に屈服せぬ」ワイルドは、夫や子供たちにも会えぬかと、ひざまずいて神の加護を祈っている彼女を見て、「古今の最も勇敢な英雄について記録されている、いかなる決意にもまけぬほどの賞讃に値する決意」をかため、彼女を犯そうとする。彼女の悲鳴をききつけて彼女は船長に救われる。この船はフランスの私掠船に会い、掠奪を受けて(夫人の宝石類も掠奪品の中に入っている)撃沈されるが、全員はこのフランス私掠船に移される。この船の船長は女好きで彼女に思いをよせるが、彼女からワイルドの仕事をきき憤激して、ワイルドをボートにのせ、半ダースのビスケットをあたえただけで海に追いやる(Fi. 10)。

こうしてワイルドは、奸計をもつて夫人を誘いだし、その宝石類を奪うと同時に彼女への欲情を満たそうとし、

惜しい所でそれらは失敗に終るのだが、彼の狡智と悪業はおとろえるどころか、彼はますます「偉大さ」への道をあゆみつつづけるのである。

さて、ボートに移されたワイルドは、一しきり、賣的言辭をはき、自分の不幸をののしり、死とあの世についての懷疑的な言葉を吐露した末、餓死するくらいなら、と海中にとび込むが (ii: 11)、思い直して再びボートに戻る (ii: 12)。そして「寒さと飢えで彼の生れながらの烈しい気性も失われようとしたとき」、フランスの船に救われる。ワイルドは作り話をして、お人好しの船長の同情を引き、イギリスの漁船が見えたときに、ボートを賃して貰い、漁船に近づいて救い上げて貰う。そして漁夫に、あの船はフランス船で、あれを捕えるのに助力したいからディールへ全速力でやってくれ、と頼み、ディールに着く。そして再び作り話で漁夫をだまし、御馳走にあずかったばかりか、「借用」という「奪取方法」を用いて、金を捲きあげ、駅馬車に乗り、ロンドンに戻る (ii: 13)。

ワイルドは駅馬車の中で、ロンドンで金を受取って帰る予定にしている一人のカモを見つけ、ロンドンに着くと、仲間のメアリボーンに、この紳士から金を奪って殺してしまえ、と命じる。メアリボーンは殺すことを承知しないので、ワイルドは、「国民たち全部を虐殺して、不滅の名誉をえた、輝やかしい英雄たち」のことは別としても、人殺しは悪いことではないぞ、と説弁を弄して彼を納得させようとするが、頑として彼の命に服従しないので、ワイルドは間もなく彼を信頼できぬ奴として、告訴して処刑させてしまう (iii: 3)。そして、この仕事をファイアブラッドに託す。この若者は、彼の命令をすぐさま、ひきうけ、ひとりの人間を殺すことを躊躇するどころか、乗客や馭者全部の脳ミソをたたき出してもいいか、と訊ねる。ワイルドは他の者を傷けぬよう厳命して彼を行かせるが、この「きわめて前途有望な若い英雄」は、「トロイ戦争の勇士イーネーアス (Aeneas) の忠実な友アケイティーズ (Achates) あるいは、むしろ、アレグザンダー大王の親友ヒフェスティオン (Hephestion) とも云うべき人物」で、「第二流の『偉大な人間』たるべきあらゆる資格を持っていた。いや、別の言葉で云うと、彼は、真の、つまり、第一流の『偉大な人間』の手先となる資質を完全にそなえ

ていた。彼は「慈悲、謙遜、恐怖」などを全く有していなかった。この男にワイルドは先の仕事を命じる。そして、「おのれの情欲への屈従」という、「英雄的性質の男性に、生れながらにして具わっている」弱点、を持つワイルドは、リテイシアを訪ねるが、そこで、ハートフリーがニューゲイト監獄に移されたことをきく。彼は、自分がひどく危害を加えたハートフリーから復讐されぬかという恐怖、懸念から生じる、一種の憎悪から、彼を絞首刑に会わせてやろう、と考える(三三)。ワイルドの非常な天才が考え出した、この偉大高貴な計画」を遂行するには、まず、ハートフリーの信頼を取り戻すことが必要だった。彼は、「泰然自若」つまり「図々しさ」の点で誰にもおとらなかつたが、これを遂行することは至難と思えた。しかし、やってみる決心をする。彼は、計画をきめるとすぐ実行に移し、ニューゲイトを訪ね、彼を熱烈に抱き、そしてキスをして、自分の無分別を自ら責め、その不首尾をなげき、ああいう行動を取った動機と、夫人を犯そうとしたことは隠しておいて、一切をぶちまけ、君の財産を守ろうとしてやったことだ、と告白する。妻が自分をすてて逃げたのではないかと妻の不実を悲しんでいたハートフリーは、このつつみかくさぬ率直さと落ちつき払った態度や友情を装った尤もらしい言葉などに見事にだまされ、彼を悪者だと思っていた気持がぐらつく。この気持にワイルドは、すぐさま、つけ入り、自分をこきおろし、伯爵を呪い、夫人は情深い人に守られてダンケルクより遠方にはつれて行かれてないから、そこから連れ戻せると云う。ハートフリーは、ワイルドへの不信をすてる。ワイルドは、ハートフリーから、妻はつかまっているのに君だけどうして脱れられたのか、と質問されると、夫人を襲ったからではなく、宝石類を守ろうとしたためフランス人船長に追放された態にし、他のすべてのことについてはできるだけ真実を語ったが、これは彼の云う「敵の大砲を敵自身にむける」術なのである。「この賞讃すべき真に見上げた振舞によって」、彼はまず成功を収め、次に、世人の不親切さ、債権者たちの苛酷さ、法律の不当なきびしさを非難したのち、彼に、自分が監獄内で一味を糾合するから、脱走を計ってはどうか、一人二人、人が殺されても、君には罪はかからぬ、と思い切って話をきり出す。ハートフリーは、自分は自由や生命より、善良な良心を失いたくない、と、きっぱりはねつける。ワイルドは内心軽蔑するが、政治家たちもこういう場合には長じている、あの巧妙な「退却術」を用いて、話をそらし、尽力を約束して立ち去

る (iii. 5)。

一方、ファイアブラッドの方は、ワイルドが襲えと命じた紳士は、目ざす馬車には乗っていないかったので、無茶苦茶にピストルをぶっぱなし、乗客の一人に傷をおわせ、金十一ポンド、銀時計二個、結婚指環一個を掠奪して引きあげるが、獲物だと称して二ギニーと指環だけをワイルドに渡し、あとは猫ババをきめこむ。これがあとでバレるが、この男は有望な男なので、ワイルドは信義心がなければ、どろぼう稼業もおわりだ、このことはおぼえておけ、と叱るだけで許してやる。

ワイルドは、今や一味を組織化し、皆から服従され恐れられるようになり、その上、彼は事務所を設け、謝礼金を取って盗品を元の持主に返してやる仕事を始め、これが成功して、将来産をなすこと疑いなし、と人々から思われるようになった。それで、スナップ氏と、父のワイルドは相談して、ワイルドとリティシアを結婚させる話がすむ。ワイルドはファイアブラッドに彼女への恋情を打明け、誤字だらけの熱烈な恋文をしたため、ファイアブラッドに持たせてやる (iii. 9)。リティシアは軽蔑的にこの手紙を見、こんなものは返してくれ、と云って、ファイアブラッドに、みだらな色目を使い、ふれなば落ちゃん風情を示す。「後へはひかぬ若者」であるファイアブラッドは、ただちに行動に移り、あつというまに二人は出来てしまう。ファイアブラッドは充分に彼女を楽しみ、なにくわぬ顔でワイルドの所に戻り、彼女をほめあげる。

やがてワイルドはリティシアと結婚するが、それまでに、なん人も愛人を持ったリティシアは、数人から得たものを夫に期待しすぎたためか、二人の間はうまく行かず (iii. 12)、二週間たつと、もう夫婦喧嘩を始め、互に罵りあい、今後は同居しても別々の生活をする約束が成立し (iii. 18)、二人は互に相手を苦しめあうことに喜びを感じるようになり、平静な楽しい日は一日とてない。とどまるところをしらぬ邪悪さ、という点をのぞけば、偉大な人間も、こういう点では、他の人間と変りはないのである。さて、ワイルドは、「純潔なるリティシア」への情欲がさめると、破産の宣告を受けて、フリート監獄の特許区域に住んでいるハートフリーを訪ねる。ハートフリーの方は、先の訪問で、ワイルドを悪党だと考え始め、彼が妻を誘拐して、金品を奪い、殺してしまったのではないかと思ひ、彼の忠実な徒弟のフレンドリと相談して、彼を治安判事につきだすため、フレンドリが令状を携え、警官をつれて、彼を探しまわっている所だった (iii. 26)。ワイ

ルドは、「正直とよばれる、あのあわれな低級な性質」を全然持ち合せていなかったから、人が正直なんでものを持っていないと考えており、今度はハートフリーに盗みをすすめて、ワナに落そうと考えていたのだが、ハートフリーに冷たい「忘恩的」態度で迎えられ、提案をきっぱりと拒否されたうえに、フレンドリが警官をつれて入ってきて、ワイルドはつかまり、治安判事の前に連行される。が、奸智にたけたワイルドは、ボートにもう一人の男がいたと告げ、その男を呼びたいと主張し、ファイアブラッドの出頭を求める。ファイアブラッドは、「美しい」リティシアの腕から離れたばかりの時に、その伝言を受取ったのであるが、すぐ出かけて、口裏をあわせて偽証し、ワイルドは放免され、ハートフリーは、裁判官はじめ、この話をきいたひと皆から、腹黒い忘恩の徒と思われる。ファイアブラッドが示したこの友情は、同じ仕事に携っているという絆のほかに、二人の間にリティシアをはさんでもっと近しい強力な結合があったわけで、これは、現代史において、夫と愛人との間によく存在する愛情と親しみの固い交りの正当さを立証するものである(III. 10)。

このように、ワイルドは、ハートフリーを破滅させようとする偉業の途中で、一度ハートフリーの反撃に会い、その偉業も挫折するかに見えたのであるが、彼は鮮やかにその危機を脱し、再び奸智をかたむけて偉業の成就に邁進する。

ワイルドは、このことによって一層ハートフリーへの憎しみをあふられ、今度は、ハートフリーが債権者を欺す目的で最も高価な宝石類を妻にもたせ故意に外国へ逃がした、と訴えでることを考えつき(III. 11)、偽証の才能あるファイアブラッドを使い、ハートフリーの債権者のうちで最も苛酷な男に、このことを治安判事に訴えさせる。ハートフリーは逮捕され、ニューゲイト監獄に送られる(III. 12)。妻の失踪以来すべてを神の御心に託しているハートフリーは、平静な気持で安眠するのに反し、ワイルドの方は、計画成就以前に夫人が帰国せぬか、また、「完全に『偉大な人間』」ファイアブラッドが裏切りはせぬか、と案じて、夜も眠れない。ファイアブラッドの頭には、事実、反対側について得をしようか、と

いう考えがしのび寄っていたのだが、ワイルドは約束をふんだんにならべ立てて、これをふせぐ。

この時、リテイシアの姉シオドウィアが伯爵の子を生み落すという事件が起る。ワイルドは、このゆううつな知らせをもたらし、苦悩の色を示しているスナップ氏に、「父親は誰です？」と微笑を浮べて訊ねただけだが、「純潔なる」リテイシアの方は、彼女を愛してくれた姉のこの「ただ一度のあやまち」に対し、ものすごく憤激して、みだらな姉を罵り、家から追出してしまえ、と父に云う。「この純潔なる婦人の貞操愛は、かくも烈しく、かくも猛烈だった」のである。主人公の身に話を戻すと、ワイルドは、前記の心配の他に、いつか仲間が、わずかな金に目がくらんで、自分を絞首台に送りませぬか、という恐怖に襲われつづけて、野心を持たぬ者の目には哀れにさえ見えるほどで、偉大さと幸福は必ずしも両立するものでないことを彼は身をもって示す (iii. 14)。

彼の徒党のなかに、屠殺者のブルースキンという名の男がいたが、この男は、「偉大な人間の二つの特質、つまり、臆することを知らぬ勇氣と、『私のもの』と『汝のもの』という馬鹿々々しい区別への絶対的な輕蔑」と、「第三の英雄的特質、野心」を有していて、掠奪品をワイルドに渡すことを頑として承知しない。そして仲間を煽動して、ワイルドに反旗をひるがえそうとする。「決断力に乏しい正直な人間だけが怠惰や休息にふけることができる」のに反し、偉大な人間に相応しく「いつも警戒し、目的の遂行に当っては迅速な」ワイルドは、ただちに彼を警察に密告して、逮捕させ、すばやく、彼を破滅させたかもしれない、この陰謀の芽をつみ取り、他の者への見せしめとする。ファイアブラッドも、この陰謀に加担しかけていたが、この結果を見て、また、ワイルドの味方につき、陰謀の内容を密告するが、「悪党は火薬と同じで、両者とも、誰か他の人間や動物に危害を加えようとする目的を果してくれると同時に、用いる本人をも吹きとばすことがままある」ことを熟知しているワイルドは、陰謀に加担した連中を許してやる (iii. 16)。

このようにワイルドは、偉大な人間たちをひき連れて、偉大への苦難にみちた悩み多い道を、あえぎながらも依然として鮮やかな偉大さを發揮しつつ押し進み、あくまで、ハートフリーを破滅させる偉業をなし遂げようと

する。しかし、それを成就したかに見えるその瞬間に、彼は運命の女神の移り気によって悲惨への道をたどり始める。いやむしろ、偉大な人間の栄光とも云うべき死によって、その偉大さを完全に飾ることになるのである。

さて、やがてハートフリーの裁判が中央刑事裁判所で開かれ、ワイルドとファイアブラッドの偽証により、彼は有罪の判決をうけ、ワイルドは偉業を果す。しかし、たまたま、同じ日にブルースキンも、ワイルドのために、強盗の罪を宣告されるが、彼の近くに立っていたワイルドは、隠し持っていたナイフで腹を刺される。だが、一命はとりとめる。しかしこの事件がきっかけとなり、この種の偉大さを敵視する、ある学識ある裁判官が、法令中に、他人の手を用いて盗むことは極刑に処せられる、という一条項を探しあて、ワイルドは、このワナに落ちこむ破目になる(241)。この法令が公布されてまもなく、ワイルドは部下から盗品を受取って謝礼金と引替えに持主に返してやったのがバレ、ニューゲイトに送られる。彼を、やはり、スリを働いて、ここに入れられたリティアが訪ねて来、さすがの彼も喜ぶが、それも、つかの間のことで、二人は口論を始め、互に罵りあい、爪でひっかかれながらもワイルドは彼女を部屋のとへほうり出してしまふ。そこへファイアブラッドが訪ねてきてくれ、ワイルドは元気になるが、彼はワイルドに友情を披瀝したのち、リティアを慰めに行ってしまう——それが彼の目的だったのだから(242)。ワイルドは、獄中でも偉大さを発揮し、巧妙な弁舌をふるって、ロウジャー・ジョンソンなる男にとって代り、ニューゲイト中のどろぼうのかしらにおさまり、彼ら囚人を擁護取り始める(243)。やがて、ハートフリーの死刑令状が監獄にとどく。そして、憂慮を示めさぬハートフリーに反して、前日、ハートフリーの子供たちが泣きながら父親のところから連れ去られるのを目撃して、この光景を忘れようと努めていたワイルドは数日後処刑される犯人にまじって、ハートフリーの名が呼び上げられるのを聞くと蒼白となり、部屋に退いて苦悩し、眠ることもできない。恐しい幻想になやまされて彼は、「まだ奴の破滅を阻止できる。今からでも一切をぶちまけられる」と叫ぶ。「彼はこう叫んでから一瞬間をつぐんだが、偉大さがすぐさま彼を救いに戻ってきて、最初彼の心に浮んだその卑しい考えを阻止した」。そして、「たった一人の人間の生命がなんだ、『一人の偉大な人間』の

名譽のために、全軍隊、全国民が犠牲にされたことがあるじゃないか」、「おれは一家を破滅させ、無実な男を絞首台に送ったが、むしろ、アレグザンダーと共に、自分のやったことばけなことを後悔するより、もっと多くの者を破滅させなかったことを嘆くべきだ」、おれの名譽を汚すことはできぬ、と心をはげます (iv. 4)。

死刑の日になると、ハートフリーは子供たちに別れをつけ刑場に赴くため馬車の方に歩み出したとき、狂乱の態でハートリー夫人が駆けつけて来る。そして、夫婦が涙ながらに別れをつけ合っているとき死刑延期の令状がとどく (iv. 5)。これは、ファイアブラッドが強盗の現行犯で逮捕され、ハートフリーを投獄したのと同じ治安判事に取調べられたが、彼は、ハートフリーの罪を証言した二人のうち、一人 (ワイルド) は投獄されており、一人はこういう罪を犯して自分に調べられているのに疑惑をいだき、ファイアブラッドをきびしく詰問して一切を白状させたのだった (iv. 6)。夫人が、ハートフリー、フレンドリ、判事に、自分の冒険談を語っている (iv. 7, 8, 9, 11) 最中に、ワイルドの方は、ファイアブラッドが妻の腕に抱かれている現場を発見して、激怒し、ワイルドとファイアブラッドは大喧嘩をおっぱじめ、なぐり合う (iv. 10)。

ワイルドは裁判が始まると、多数の虚偽の証人を集めるが、その効なく、死刑の宣告を受ける。彼は酒をのんで憂さはらず。リティシアも一度訪ねて来るが相かわらず彼を容赦なく苦しめる。彼は教誨師とも話しあうが (iv. 12)、無信心なワイルドと酒のみで衛学的な教誨師とは、一緒に酒を飲む位がおちで、ワイルドは寝込んでしまつて、これも、彼の救いにはならない (iv. 13)。絞首という、「人間的偉大さの最高の仕上げ」の日が近づいて来る。彼は落胆も悔悟の色もなく、顔には自信と落着きの色がうかび、友人や教誨師と酒をのんですこし、死ぬのが怖いか、ときかれると、「しゃらくせえ、そんなものは音楽のないおどろきみてえなものよ」とか、「畜生、なにがこわいもんか!」とか、そり身になって大声で答えたりする。死刑の前の夜、彼はリティシアに会うが、例によって、彼が腹を立て、彼女の髪をひつつかんで彼女を部屋からけり出してしまふ。死刑の日の朝、彼はアヘンチンキを飲んで自殺をはかるが果せない。そして馬車に乗って、ため息をついたり、罵ったり、歌ったり、口笛をふいたりして、その「偉大な振舞い」で見物人を感嘆させつつ、

光榮にみちた絞首台につく。そして野次馬連の歓呼と罵言をききつつ、石などの雨をあびながら、祈禱を唱える教誨師のポケットから、栓抜きを失敬して、あの世へ赴く（V. 14）。

これがワイルドを中心とする「偉大な人間」たちの世界——再び、ウイルコックスの言葉を用いれば、「悪の密林」——のもつれ合った邪悪な全貌である。簡単ながらも容姿や服装の描写や記述のあるのは、トム・スマーク、リティシア、バグショットのみであり、ワイルドやリティシアなどを除く他の多くの人物は、スケッチ風の性格描写しか与えられていないが、ワイルドをはじめ、悪の世界に住む彼らの大半は、後の善良な世界の住人たちに比して、生き生きとしている。特に主人公ワイルドの性格と行動とその生涯の記述を詳細にたどってみると、かくも偉大な、つまり、かくも邪悪な、人間の典型を、このように見事に、生き生きと創造したワイルディングの腕前と、その底知れぬ豊かな想像力に感嘆せずにはいられない。彼は、邪悪さの権化とも云うべきワイルドの、ハートフリーを詐取し、一家を破滅させようとする偉業を中心にすえ、伯爵、バグショット、ファイアブラッド、ブルースキン、メアリボーン、リティシア、ストラドル嬢たちとの入りくんだ軋轢を巧みに配し、それらを通してワイルドの偉大さをあます所なく描きとる。ここには、ワイルドの悪事を行う驚嘆すべきあくらつな才能、狡猾さ、奸智、悪智恵、貪婪強欲、たくみな弁舌、相手の弱みを看破しそれにつけ込む能力、旺盛な肉欲、口約束と虚言と威嚇、泰然自若たる態度、鉄面皮な図々しさ、豪胆、鋭気、あくなき権力欲、虚偽、欺瞞、しらばくれ、裏切り、搾取、利己心、贈賄、実行力、悪事を遂行する粘り、精神の統御力、とどまるところを知らぬ野心、尊大な自負心、巧妙な策略とかけひき、憎悪の激しさ、瀆神の言辞、正直・憐愍・寛容・慈悲・善良・友情などへの輕蔑、高圧的な恩きせがましい態度、殘虐冷酷、忘恩、背信、用心深い警戒心と保身術、密告、

など枚挙にいとまないほどの「偉大な人間」の特性が、ワイルドの行動と言辞を通して、あますところなく、見事に描出されている。普通ならば、美德とも云える性質さえもが、ワイルドの行為と目的がつねに邪悪であるがゆえに、彼の場合には悪徳として毒々しい光を放っているのである。かかる果しない邪悪さを有しながら、ワイルドが非現実的な怪物や単なる観念的存在となっていないのは、フィールディングが、「自然は、多くの場合、諸人物を完全無欠なものとして描く作家たちほど親切ではない。自然は、完全に偉大な、あるいは、完全に低級な人間などというものを、めったに創り出しはしない」(第四卷第四章)という人間観に立ち、ワイルドにも、多くの弱点や失敗や人間らしさを、いかにも自然に附与しているからである。彼はハートフリーから詐取した宝石類をひとり占めしようと思っているのに、伯爵に先手をうたれて模造品入りの宝石箱をつかまされるし、ストラドル嬢を相手に欲情をみたし、そのあとこっそり逃げ出して彼女に酒場の勘定を払わせるのはいいが、その愛撫中に金をスリとられるような失敗もやらかす。また、大金を持っているとにらんで仲間と襲った紳士が二シリングしか持っていなかったというヘマもやる。恋するリティアには次々と情人をつくられ、彼女から冷たい仕打ちを受けるばかりか、結婚後もすぐ大喧嘩をはじめ、その後、絞首されるまで苦しいちめぬかれる。彼は、また常に仲間が裏切りはせぬかという不安に襲われるし、仲間にだまされたり、刺されたりもする。さらに彼は、クローディアス(Claudius)がおのれの犯した罪のおそろしさにさいなまれて、思わずひざまずいて神にさげすむことがあるように、ハートフリーの死刑執行の知らせを聞いて、一瞬、一切をぶちまけて彼を救ってやろうか、とさえ考えもする。そして、絞首刑に処せられることになると、恐怖を感じ、夜も眠れず、酒で憂さを払ったり、自殺をはかったりする。このような彼のヘマや失敗や弱点や弱さの巧みな描写や記述が、彼を偉大さの典型であると同時に、血のかよった一個の人間として、地上につながとめているのである。

彼を取り巻く連中も、偉大な世界に相応しい存在である。仕立屋の払いをとどこおらしてスナップ家に監禁された伯爵はインチキ・トランプと賭博の名手で、ワイルドの才能を認めこれを上流社会に紹介してやったり、ハートフリーから宝石を詐取する計画に加わったりする。そして、賭博で儲けた金をワイルドに掠奪されはするが、彼もさるもの、ハートフリー詐取事件ではワイルドに見事一杯くわせ、ニセの宝石をつかませて逐電し、後には、ハートフリー夫人の冒険旅行中、彼女を襲って果さず、フランスに行つて強盗を働き車裂きの刑に会う。墮落した警吏のスナップ氏とワイルドの父は、リティシアとワイルドの結婚で互にうまい汁をすおうと苦心する(III.7)。スナップの娘のショドウシアは、後にはおこないを改めるが、伯爵と密通してその子を生んだり、リティシアがワイルドを欺すのに力を貸したりする。リティシアは純潔貞淑を装っているが淫奔で、トム・スマーク、バグジヨット、ファイアブラッドなどとの色事にふけり、そのくせ、姉が伯爵の子を生んだときには誰よりも姉を非難罵倒し、ワイルドとたえず喧嘩口論をして、死ぬまで、彼をいぢめ抜き、自分もスリを働いて投獄される、バグジヨットは、下宿代をはらわず姿をくらましてスナップ家に拘留され、ワイルドの手先となつて伯爵を襲い、その掠奪品の3、4をワイルドに捲き上げられたり、伯爵を保釈するのに必要な金をしぼり取られたりするが、ワイルドの目を盗んでリティシアとの情事にふけり、すきを見て逃亡する。彼は読み書きもできず、一片の廉恥心も正直さも善良さも有さない。モリー・ストラドル嬢は、贈物を貰つてワイルドの情欲を充たさせ、酒場の勘定は払わされるが、愛撫のすぎにワイルドの金をすり取り、おどされて、ワイルドの命令でハートフリーを襲った犯人の一人トマス・フィアスを死刑にするための偽証をさせられる。ハートフリーを襲ったもう一人の犯人ジェイムズ・スライも、ワイルドに欺されて、この偽証に加わる。メアリボーンも、この二人と同じように、ワイルドの偉大さの犠牲者の一人で、人殺しを拒否したため、ワイルドに警察に密告され、ワイルドの云うことを素直にき

かなかつたフィアスのような最後をとげる。人殺しをなんとも思わぬ乱暴者のファイアブラッドは、ワイルドの手先にふさわしい第二流の偉大な人間で、慈悲、謙遜、恐怖とは全く無縁で、ワイルドから目をかけられているが、盗品をごまかしたり、リティシアにワイルドの恋文をどけに行つて色目をつかわれ、早速、彼女を物にし、二人の結婚後も彼女と相変らず情事にふける。彼はまた、ワイルドの命によって、ハートフリーをおとし入れたリワイルドを救うための偽証をおこないながらも、ワイルドが報酬をくれなければ、いつでも彼を裏切ることを辞せず、一度は反ワイルドの陰謀に加わるが、形勢不利と見るや再びワイルドに忠義顔をし、陰謀の内容を密告する。投獄されたワイルドを訪ねて友情を被歴して彼を喜ぶが、実はリティシアに会うためであつて、強盗を働いて投獄されてからはリティシアとの情事の現場をワイルドに発見され、掴み合いの喧嘩をする。ブルースキンは屠殺者でワイルドの一味だが、臆することを知らぬ勇氣を持ち、「私のもの」と「汝のもの」という馬鹿々々しい區別を輕蔑している野心家で、ワイルドに盗品を引渡さず、ワイルドの威嚇や恩きせがましい言葉をせせら笑つて、彼に承服せず、仲間を煽動して反逆を企てるが、ワイルドに警察に密告されてニューゲイトに送られ、彼を有罪にするための証言をしたワイルドを刺す。ロウジャー・ジョンソンは、ニューゲイトで囚人に權力をふるい、彼らを搾取しているが、ワイルドにその地位を奪われる。

ワイルドをピラミッドの頂点とするこの惡の世界は、これらの諸人物の諸葛藤を通して、ヒューモラスな筆致で、まことに巧妙にそしてリアルに描き出されているが、この世界は、弱肉強食の、惡徳のせめぎ合う、汚辱にみちた、無慘な世界であり、自分一個の利益のための冷酷な裏切り、貪欲、ごまかし、瞞着、欺瞞、虚偽、憎惡、肉欲、野心、權力欲などにみちみち、一片の友情も信義も愛情も善良さも正直も存在せず、だまし合いと不安と恐怖と疑懼にあふれる、醜惡な世界である。そして、この邪惡な世界は、ハートフリーと、彼を中心とする、そ

の周囲の世界ときわめて対照的に描かれているので、それぞれの特質は、より鮮明に浮び上る。

5

それでは、ハートフリーとその世界の住人たちはどんな風に描かれているか。

トマス・ハートフリーは、「輕蔑的に、お人好しとよばれる、あのあわれな人間の種類」に属し、「人間がカマス養殖池に小魚を投げこんで、その水の王に食わすのと同じ意図をもって、自然がこの世に送りこんだ」連中の一人、である。弱虫の彼は学校時代に強欲で大胆なワイルドに誘われて窮地に引きずり込まれることがあったが、いつもワイルドが代って罪を引被り鞭打ちの刑を引受けてくれたので——尤もワイルドはその都度たっぷり金を取ったが——彼を尊敬し彼に恩義と友情を感じていた。ハートフリーの不幸は、このワイルドに、偶然、出会ったときに始まる。彼はすぐにワイルドを朝食に誘う。彼は数年前から、ささやかな宝石商を営み、愛する女性と結婚して、二人の幼い娘をもうけている。彼は「正直で率直な性質」で、「この世に、欺瞞や偽善のようなものが存在するということを、自分の天性からではなく、経験からはじめて教えて貰わねばならぬような種類の人間」で、二五歳ぐらいでは、まだまだ人から欺されやすいたちの男で、「度がすぎるほど善良で、友情に厚く、寛大」であるという「精神的弱点」を有し、同情深く、また、「客の無智につけこんだりせず、商品から薄利を得るだけで満足しているほどの愚か者」だった。彼の生活は、じみで、友人を家庭で楽しくもてなすとか、時々妻をそばに置いて一寸酒をたしなむとかが関の山で、それだから、氣前がよかったにもかかわらず薄利でやってゆけたのだった。妻君は、「容姿は美しいが、けちくさく、みすばらしい、家庭的で、しっけの悪い女」で、「家族の世話にかかり切りで、夫と子供だけが彼女の仕合せであり、高い金を払って流行や娯楽を追わず、外出することもまれで、二、三のごく普通の隣人に返礼の訪問をするだけで、年に二回、夫と一緒に芝居見物——それも平土間に限られていた——に出かけて気晴しをする程度だった」。この「愚かな男」は、この「愚かな女」を、「偉大なワイルド」に紹介

し、彼が学校時代に受けた恩義を妻に語ってきかせる。彼女はこれをきき、高貴偉大な人間の理解できぬ、慈愛の光で眼をかがやかす。ワイルドは、これを自分に気があると誤解し、彼女の美しさをしきりとほめる。貞女とは云え、彼女も女であつたから、夫と共に、悪い気はしない。ワイルドは、「少年時代から彼の善良な（つまり、愚かな）性質を知っているうえに、今また、彼の友の善良さと友情と寛大さの閃きをいくつか発見したので」、学校時代の恩義を思い出させたり、友情や、旧交を温めえた喜びを熱烈に告白したりして、伯爵を紹介する約束をする。ハートフリーは見事にだまされ、彼に大いに感謝し、昼食を取ることにさえすめる(三二)。こうして彼はワイルドに関する個所で記した通り、ワイルドの奸計にうまうまと引かかるのであるが、ワイルドは、「彼の友人ハートフリーの欠点が、頭よりむしろ心にあること、他人を害する計画を絶対に立てることができぬほど、けちくさい人間ではあるが、彼は決して馬鹿ではなく、心が動かされてその気にならぬ限り、見えすいた詐欺にはかかりにくい」ことを思い出して、自分が好意から尽力しているように見せかけ、そのうえ伯爵にも入智恵して、手のこんだ詐欺法を考え出すのである(三三)。そのため、ハートフリーは、他の宝石商から借り受けて伯爵におさめた宝石類を詐欺されたばかりか、ワイルドの手先に襲われ打ち倒されて怪我をさせられたうえ、伯爵から受取った千ポンドの現金を奪われる(三四)。ハートフリーはこれがワイルドの仕組んだ計画とは露知らない。そして、ハートフリーを避けるどころか、平気な顔で彼を訪ねて来て、驚きを装って友の不幸とその身を案じるワイルドの様子や、彼の追剥への怒りの吐露に、かえって、ハートフリーは、すまなく思い、妻と共に、ワイルドから受けた恩義を大げさに云う。しかも、店に來たストラドル嬢がくずしてくれと云った五〇〇ポンド紙幣が自分の盗まれた紙幣だと気付いても、ワイルドの自分が彼女をしらべてみようという狡猾な言葉に引っかかり、元兇がワイルドであることを発見できずに終る(三五)。そのうえ、かろうじて盗まれなかった、伯爵の振り出した二千八百ポンドの小切手は、不渡りのため、彼は破産にひんし、スナップ家に拘留される。夫人は驚き悲しみ、隣人に夫を保釈させてくれと力添えを頼んでも誰も協力してくれない。ハートフリーの方も、金を借している友人たちに手紙を書いて援助を求めるが、冷淡な返事しか貰えない。この「弱虫の、気の弱い」女は、スナップ家に夫を訪ね、苦悩している彼を一心に慰め、はげまし、悲嘆の

あまりからだをこわさぬようにと頼む。ハートフリーは妻に感謝し、二人のあいだに、「あまりにも低級で軽蔑すべき情愛にあふれた場面」が展開する(517)。ワイルドも、スナップ家を訪ねてくるが、彼は自分が伯爵に彼を推薦した罪をなじられぬよう先手を打って、彼の伯爵を信用したうかつさを激しく責めたのである、彼は庄倒されて弁解するのが精一杯である。そのうえ、明日の朝、保釈になるよう尽力しよう、という彼の言葉に、夫人は涙を流し、彼こそ本当の友人だと感謝する。そして、ワイルドが自分をねらっていることも露知らず、自宅に送って貰う(519)。そして彼女は、眠られぬ一夜をすごし、翌朝、父のないのに気付いた上の娘を抱いて涙にくれ、「この低級な女の愚かしさ」をいかに発揮する。そして、訪ねて来たワイルドの、御主人も承知の上だから、破産を宣告される前に、一番高価な宝石類を持って、自分と一緒にオランダに渡るように、という巧妙な言葉にだまされ、夫に別れをつけることも、子供をとまなせて行くことも許されず、ワイルドとハリッジに向う(520)。そして、ロッテルダム行きに船に乗り、嵐の中で、ワイルドに犯されかけるが、かろうじて船長に救われる。そして、フランス私掠船に会い、宝石類を没収されたうえ、この船に移される(521)。一方、ハートフリーの方は、このようなことを夢にも知らず、やって来た徒弟から、彼女が、夫の命令だと告げて、ワイルドと一緒に宝石類を持ってオランダに渡った、という話を聞き、彼は顔色を失い、妻が自分をすてて逃げたのだと思ひ、子供をつれて来てくれと頼み、一人になると、絶望の苦悶におち入って寝台に身を投げる。そして、妻の不実への疑いと、彼女への信頼との間で悩むが、遂に、彼女の不実を確信する。そしてやって来た子供たちを抱いて無数のキスを与え、「やさしさと慈愛というような低級な力を庄えつくれるだけの偉大さを有さぬ、このめめしい、愚かな男」の目には、涙があふれる(522)。子供が女中に連れられて帰ると、ハートフリーは、理性に頼って希望をすてず、事のなり行きは神におまかせしよう、本当に神を信じるものは、あらゆるこの世の悲しみに打ちかてるにちがいない、という結論に終る、「低級にして卑しい考えに満ち、ひとことの偉大さも含まぬ」独白に耽ける。そして、次第に、いかなる人間の攻撃にもびくともしない熱烈な信仰に入りこみ、スナップ氏が、彼をニューゲイトにつれて行かねばならないとつけたときにも、「ソクラテスが、船がついたから死ぬ仕度をしなけねという知らせを受取ったときのように」平然とその知らせ

をきく(III.2)。ボートでフランス私掠船から追放され、その後うまくロンドンに戻って来たワイルドは、彼に返報されはしないかという不安と恐怖から彼を憎み、破壊させてやろうと決意し(III.3)、そのためには、彼の信用を取り戻す必要があると考え、例の泰然自若たる態度で彼を訪ね、夫人を襲ったことだけは伏せて、一切をのこらず報告し、自分の軽卒をせめ、しかし、君のためを思ってたのだ、と弁解するが、この尤もらしい卒直な言葉や、友情を装う落ちついた態度に、ハートフリーは眩惑され、ワイルドへの疑惑は消え、彼の言葉に、妻と友への不信をすてる。それどころか、ワイルドの善意を認め、彼を慰める。これにつけ込み、ワイルドは自分も協力するからと、脱走をすすめ、人殺しさえ厭わぬ様子を示す。ここでハートフリーは、再びワイルドに疑いを持ち、軽蔑の色を浮べて、自分は生命や自由を失うよりも、幸福のものである、よき良心を失いたくない、ときっぱり拒絶する。そして、彼を滅亡させる方法を考えて夜明しするワイルドとは反対に、子供たちと遊んだのち、静かに眠りにつく(III.5)。やがてハートフリーは破産の宣告を受け、フリート監獄の特許区域に住むようになるが、リティシアとの結婚生活にあきたワイルドは彼を訪ねる。ハートフリーは、この前の、脱走をすすめ人殺しも仕方なしとするワイルドの言葉から、ワイルドをこの世最大の悪党であると確信するに至り、ワイルドが妻を誘拐し、宝石類を奪い、妻を殺してしまったのではないかと考え、忠実な徒弟であるフレンドリに相談する。フレンドリは、「多分、偉大な人物たちが、当然、低級な連中に引きおこさせるあの羨望の念から」であろうが、ワイルドを憎んでおり、主人に同感を示して彼のワイルドへの疑惑をあふったので、ハートフリーはワイルドを治安判事の前につれて行く決心をかため、フレンドリが令状をたずさえ警官をつれて、彼をさがし廻っていたところへ、ワイルドは姿をあらわす(III.6)。ワイルドは、今度は彼に盗みをすすめてみようと考えていたのだが、それを聞くと、「いかなる動機、いかなる考えからも、絶対に、他人に危害を加えないこと」を日頃の信条にしているハートフリーは、かかる大それたことをすすめるワイルドの鉄面皮をせめ、この私が、「君のような、とるにたりぬ、くだらない、卑しいけだもの」の言葉にとびつくと思っているのか、と、「わが真に偉大な人間」に対してこんな言葉を使って、はねつける。ワイルドは、始めはあくびをして聞いていたが、やがて激怒しはじめたところへ、フレンドリと警官が来て、ワイルドを捕え、

治安判事の前につき出す。ところがワイルドも、さるもの、狡猾にも、ボートにもう一人、男が乗っていたと申し立て、ファイアブラッドに偽証させて放免される。かくてハートフリーのこの必死の反撃もワイルドの勝利におわり、ハートフリーは、かえって、恩人を裏切って生命を奪おうとした「最も邪悪な恩知らず」と皆から非難される。彼は、自分の潔白を信じ、自らを慰め、じっとこらえる(III. 10)。ワイルドは、これによってハートフリーへの憎しみをあふられ、追打ちをかけて、ハートフリーが債権者をだます目的で、故意に妻をオランダにやったと、債権者の一人に訴えさせ、ファイアブラッドと共に偽証する。そのため、ハートフリーが、フレンドリと共に、子供と遊んでいる所へ、令状を持った役人がやって来て、無理やりに子供をひき離し、彼を治安判事のところにつれて行き、彼は、彼らの巧妙な偽証のため、ニューゲイト監獄へ送られる。フレンドリは彼について行き、一般の重罪人と同じ部屋に監禁されようとする主人のために、有金をはたいて、ニューゲイトの中庭プレスヤード (the playground) に一室を得てやる。ハートフリーは、彼の忠実さに感謝し、どんな苦しい目に会おうと自分の潔白がいつかは報いられると確信している、と語り、万一の場合には子供たちを頼む、と涙を流して依頼する。フレンドリは、全力を尽してこの奸計をくつがえしてみせるから、決して心配なさらないように、と答える(III. 12)。かかる不幸のなかにあってもハートフリーは、自分の計画のバレるのを心配して眠れぬワイルドとは反対に、獄中で静かな眠りをたのしむ(III. 13)。獄内で、ハートフリーは、子供たちとの会話や、その言動にのずと現われる「善良な心」のために、他の連中から「世界中で一番の馬鹿者」という評判を得、教師も、「トルコ人といえども、試実であれば救われる」という彼の考え方(これは『ジョウゼフ・アンドルーズ』中でアダムズ牧師も云っていることであり、形式的な信仰より実践を重視するワイルディング自身の考え方である。)から、彼を悪党呼ばわりする。フレンドリは近くおこなわれる裁判に具え、証拠集めにとび廻る以外は、主人の傍におり、この若者と子供たちが今ではハートフリーの唯一の慰めとなる。フレンドリは、万一の場合には、自分のわずかばかりの財産を子供さんたちのために用立て、父親代りになって下のお嬢さんを育て、上のお嬢さんは、自分が頂いて大事にする、と云って、彼の恩義に報ゆる決心をのべる。ハートフリーは、これを聞いて彼を抱きしめて感謝し、自分の身にとって完全無欠であった妻の身の上を案じる。フレンドリは、しきりに慰めるが、かかる、めったに見られぬ友情を示した若者は、

獄中で、「主人におとらぬ、風変りな愚か者」という評判を得、二人は、物笑いと軽蔑の種となる。ハートフリーの裁判では、フレンドリの奮闘も、正直な年とった女中の証言も効なく、ワイルドとファイアブラッドの偽証のため、有罪の判決を受け、ワイルドの計画は今や成就する (iv. 11)。やがて、ハートフリーの死刑執行令状がとどき (iv. 12)、彼が「不名誉な死」をとげる日が来る。彼は前夜に、子供たちに最後の別れをつけ、当日、フレンドリと別れの抱擁をかわし、彼につき従われて刑場へ行くため馬車に乗りうとしたとき、狂乱の態で、突然、ハートフリー夫人が駆けつけ、彼の手の中で気絶する。そして、われにかえると、こんなことになった理由を訊ねる。フレンドリは、かしら株の役人のほめかしに応じて五ギニーを出し、一室で夫婦に最後の別れをつけさせる。夫人は話をきいて再び失神するが、かしら株の役人はハートフリーをせかせる。彼が妻を抱擁しているうちに、彼女は意識を取り戻したので、彼は、もう十分の猶予を乞う。すると、この役人は、フレンドリに、彼にもう三十分のばしてやったらいくらかくれるかとかけ合い、二十ギニー支払う約束をさせたうえ、こうなったら、よい知らせを隠しておく必要はない、この紳士は死刑の執行を延期された、と告げる。すこし前に彼にその知らせをささやいた者があったのである (iv. 15)。これは、偉大なファイアブラッドが強盗を働いて、ハートフリーを投獄したのと同じ治安判事に取調べられる破目だったので、この判事は、ハートフリーに不利な証言をしたファイアブラッドとワイルドに疑いを抱き、ファイアブラッドを詰問してドロを吐かせ、ハートフリーのために死刑執行の延期をえてやったのだ。そしてこの判事は、ハートフリーを訪ね、夫人から、ハートフリーやフレンドリと一緒に、彼女の冒険談をきき (iv. 16)、一切を知って、ハートフリーの赦免をえてやり、さらに、夫人が最後に宝石を没収されたイギリス軍艦が帰国した際に、これを取り戻してやり、さらに、人々に彼の無実を説き、彼の評判を回復させる労を取ってやる。こうして、ハートフリーは、再び商売を始め、儉約と勤勉によって資産を作り、フレンドリは長女の婿となって彼の共同経営者となり、一家族が同じ家に住み、この一家は「愛の一家」とよばれるに至るのである (iv. 16)。

これが、ハートフリーとその妻、および、彼をかこむ人物たちの行動と性格であるが、ハートフリーは、ささ

やかな宝石商を営む、善良で正直で寛大で友情に厚く、信仰心にあふれ、他人に危害を絶対に加えることのない、そして、この世に欺瞞や虚偽の存在することを知らないような人間である。フィールディングの小説中の肯定的主人公は、ニュアンスの差こそあれ、かかる性質をその中核に持っているが、このハートフリーも、アダムズ、ジョゼフ・アンドルーズ、トム・ジョウズ、ブースやその夫人たちと共に肯定的に描かれている人物の一人である。彼は、決して馬鹿ではないが、その善良な性格ゆえに、人に欺まされてひどい目に会うまでは、つまり、経験によってでなければ、欺瞞や偽善のような悪徳が存在することを悟りえない、きわめて欺まされやすい性質である。彼は、つましく、勤勉であり、暴利をむさぼる商人ではない。彼と相愛の妻も、同じく善良で、つましく、夫と子供たちの世話をすることを唯一の幸福と考える家庭的な婦人で、ハートフリーは、この妻と二人の娘を熱愛して、ささやかな家庭的だんらんを楽しんでいる。この夫婦は、あまりにも善良であるがゆえに、あまりにも偉大なワイルドの奸智と狡猾さに、翻弄され、彼のために一家は破滅に頻するが、最後に「善良な」判事の出現によって報いられる。

逆説的に記述されている、彼の卑小さ、低級さ、愚かしさは、ワイルドの「偉大さ」と常に対照的に描かれているが、彼は、ワイルドによって苦境におとし入れられてからは、自分の良心の潔白さへの確信と、理性的態度と、熱烈な信仰心によって、また、忠実な徒弟のフレンドリの温い慰めと子供たちへの愛情にささえられ、あらゆる苦難を次々と静かに受け入れ、その平静さを失わず、真の意味で偉大さを発揮する。一方、「偉大な」ワイルドの方は、彼を破滅させようとあせればあせるほど、計画遂行の焦慮と、相手から復讐されぬかという不安と恐怖におそわれ、そのうえ、仲間の裏切りを怖れ、妻には悩まされ、死に戦慄し、その心は平静とやすらぎを失ってゆき、その精神はみじめさと卑小さを示して行く。そして、この二人は、精神の偉大さにおいて、その真の

姿を露呈しはじめるのである。

ワイルドは、彼をなやます浮気で淫奔な妻や、いつ彼を裏切るかも知れぬ、そして、彼の方でもたえず搾取したり裏切ったりしてきた多数の悪事を働く仲間たちの中にいる。ハートフリーは、熱愛しあっている妻と、身ゼニを切って主人に尽したり、子供の世話を引受けたり、彼の無実をはらそうと懸命になっている献身的で忠実な、そして互に信頼しあっているフレンドリたちにかこまれている。このように、フィールディングは、低級卑小ではあるが心やすらかなハートフリーと、偉大ではあるが、さまざまの不安と恐怖に心をさいなまれるワイルドとを対比し、また、ハートフリーと妻とフレンドリーとの間の愛と信頼に満ちた世界を、ワイルドと彼の妻と、彼を取巻く偉大な人間たちとの不和とだまし合いと裏切りの利己的世界に対照させつつ、二つの相反する社会を描き出している。

ただ皮肉なことに、多くの小説がしばしば、そうであるように、この善良な世界の人物たちは、邪悪な世界の人物たちにくらべて、概して平板である。アダムズやトム・ジョウンズと比して、ハートフリーは、積極的に悪と戦う人物ではなく、常に受動的な立場に置かれている。彼はワイルドの發揮する邪悪な攻撃に耐えるサンドバッグのような役割をつとめさせられ、悪に耐える善良な精神の偉大さのみを読者の前に示めす。彼は邪悪なピンでとめられた蝶のように、その一面を示すのみで、アダムズやトム・ジョウンズのように、小説中を舞いとび、その変化にとむ多彩な姿を読者に示すことがない。それは邪悪さの暴露と諷刺がこの小説の大きな部分を占めているからであって、マッキロップが、「この物語は、小説よりはむしろ諷刺として判断されるべきである」と云ったのは、このような意味からであらう。

いずれにせよ、善良なハートフリーとその一家は、忠実で心温い主人思いのフレンドリたちごくわずかな人び

とによって支えられるだけで、たえずワイルドの奸計にさらされ、最後に現われる治安判事を除いては、彼らを救ってくれる隣人も友人も、同情をそそいでくれる人もなく、社会的迫害のうちに、孤立している。フィールディングは、この小説で、古今の偉大な人間と、その偉大な世界の正体を暴露すると同時に、この善良なハートフリーへの迫害と孤立のうちに、古今の社会においてかかる善良な人間が置かれてきた位置と、社会的現実の不合理にみちた真実の姿を、心に悲しみと怒りを抱きつつ、象徴しているのである。とくに、ワイルドとハートフリーの葛藤のうちに、フィールディングは、十八世紀社会の汚辱にみちた一面を具現したと考えていいであろう。

6

この小説は、ワイルドのたぐいまれなる邪悪さと、彼の善良なハートフリー一家への執念深い、あくどい迫害という内容からみて、これは、普通ならば、十九世紀の偉大なリアリスト、バルザック (Balzac) の悪が栄え善がほろびる、いくつかの小説のように、陰うつな悲劇的な物語になるべきものだった。しかし、それを救っているのは、まず第一に、フィールディングが邪悪さに対する憎悪と怒り、善良さに対する心からの愛情と同情をおさえ、一種の超然的な態度を保ち、同時に、「邪悪さ」を「偉大さ」、種々の悪業を「偉業」、悪らつな企てを「偉大にして高貴な計画」、淫奔なリティシアを「純潔なるリティシア」などと呼び、「善良な人びと」を「愚かな人間」「あわれな小人」「低級な人間」、愛情にみちた情景や振舞いを「低級な場面」とか「低級な卑しい振舞い」、主人思いの忠実な行為を「愚行」などと記す、一種の逆説的記述——これは、多くの個所すでに実例をあげておいた——を用い、さらに、この物語を彼独特の諸諺や皮肉や諷刺にみちた筆致で、戯画化して語っているからである。この小説が、まことにすぐれた諸諺、機智、皮肉、諷刺にとんだ、さまざまの比喩、記述、描写

にあふれていることは、今まで、そのような個所をできるだけ記しておいたので、ここで一々実例をあげることがはぶくが、フィールディングは人びとの笑いを誘いつつ、このいんうつな小説をたのしく読ませるのに成功している。たとえば、次のような記述は滑稽さのうちに、なんと見事に、伯爵とワイルドの性質を描き出していることであろうか。伯爵はインチキ・トランプの名手であり、ワイルドは彼のポケットから彼が勝った金を失敬することを常習にしているのであるが、第一巻第六章に、一文なしの二人がトランプをやるところがある。

伯爵は、自分がどんなに勝っても、ワイルドから一シリングも貰えないことを承知していたが、それでもトランプをゴマかさずにはいらなかったし、また、ワイルドの方も、空っぽとは知りながら、友人のポケットに手をつっこまずにはいらなかった。

こう云う記述が陰惨になるべき物語に明るさを与えているのだが、第二に、この小説を明るくものにしているのは、彼のすべての小説がそうであるように、この小説も、最後に邪悪なワイルドが敗北し、善良なハートフリー一家が幸福になるという、その結末である。しかし、この明るい結末については一言しておかなければならない。それは、フィールディングの、また、とくに、この物語の、弱点とも云うべきものと密接に結びついているからである。

この小説の最後は、ハートフリーの勝利、彼の一家の繁栄と幸福という、ハッピー・エンドで終る。フィールディングが描いているような、邪悪さが善良さをかくも圧迫する社会において、ハートフリーは善良ではあるが、あるいは、むしろ善良であるがゆえに、あまりにも力弱い。彼は、ワイルドに疑念を持ったときに、フレンドリと共に彼を捕えて、治安判事の前に連れて行く。これが、彼のただ一度の精一杯の反撃であるが、これも、ワイ

ルドがファイアブラッドに偽証させて、たくみにのがれてしまう。ハートフリーは孤立しており、ワイルドの狡猾な邪悪さを向うにまわして戦うには、力がたりない。この小説は、本来ならば、悪が善を亡ぼすという悲劇、あるいは、ワイルドの願望の成就というバルザック的な悪の叙事詩として終るべき性質のものであった。一步ゆずって、ワイルドが法令にひっかかってニューゲイトに入れられたことを考慮に入れても、ハートフリーもまた破滅するという最後で終るべきものであった。彼はおのれの力ではワイルドの奸計からのがれることはできない。それゆえ、彼が最後に記されているような幸福な境遇になるためには、二つの必須条件を必要とする。一つは、誰かが彼を救い、ワイルドの奸計を破滅させてくれることであり、第二には、彼が物質的繁栄をえるために、一度破産してしまった彼が、商売を繁昌さすための物質的基礎を再び獲得することである。かくて、ワイルドを破滅させハートフリーを救うために、「善良な」治安判事の出現と、彼が失った宝石類の取り戻しと、あらたな宝石の獲得などが、ハートフリー一家の繁栄と仕合せを成就さすために必要となる。

まず、第一の治安判事の出現から始めよう。ワイルドはハートフリーを破滅さす最後の手段として、ハートフリーが債権者をだますため、高価な宝石類を妻に持たせ、故意に、オランダに逃がした、と訴える決心をし(III:ii)、ファイアブラッドと相談し、最も苛酷な債権者の一人に伝えて訴えさせ、ファイアブラッドが宣誓して事実であることを証言したので、ハートフリーは逮捕され、治安判事の前につれて行かれる。「ファイアブラッドの証言は非常に明白かつ強力で、判事は、ハートフリーに対してひどく立腹し、彼の有罪を確信したので、彼の弁明をほとんど聞こうとしなかった」。そしてハートフリーはニューゲイトに送られることになる。フレンドリは、この判事が「頑固で」「なにを云つても効果がなく、ハートフリーがニューゲイトに送られるのを到底まぬがれそうもないのを見て」、主人について、ニューゲイトに行く決心をする(III:12)。

しかし、その後、ファイアブラッドが強盗の現行犯でつかまり、この同じ治安判事の前に連れてこられる。「この判事は、彼のたずさわっている職務にすくなく名譽をあたえている人で、彼は同国人の生命、自由、財産を左右する決定をゆだねられている、自分にまかされたその重い任務を充分に考慮した。それで、彼は、常に、あらゆる些細な点に至るまで、この上なく勤勉に用心深くしらべた。そして彼がハートフリーを監獄に送ったときにも、フレンドリと女中が、ハートフリーは立派な人だと述べたことを充分考慮に入れていた」ので、ハートフリーが監獄に送られ、有罪の宣告を下されることになった証言の主であるワイルドとファイアブラッドのうち、一人はニューゲイトに重罪で入っており、他は強盗の罪で自分の前につれて来られているのを見て、大いに心がぐらついて、今度はファイアブラッドを徹底的にしらべ上げて、二人が偽証したことを知り、死刑執行の延期を計ってやり、夫人の冒険談を親しく聞き (iv. 9)、彼が赦免されるよう力を貸し、さらに、夫人の宝石類を最後に没収した軍艦が帰国した際に宝石類を取り返してやったばかりか、彼の評判を回復させてやり、隣人、知人、顧客に彼が潔白であることを説得してやる労を惜しまなかった (iv. 15)。一方、ワイルドは有罪の宣告を受け処刑されるのである。

第四卷第六章に記されているような、善良にして有能で細心な判事が、第三卷第十二章で、ワイルドやファイアブラッドの偽証をやすやすと信用し、あっさりとはートフリーをニューゲイトに送ったこと、また、上記一つの章の、この判事についての記述の間に、いささか喰いちがいが感じられることは、大目にみるとしても、この善良にして責任感の強い判事が、ワイルドはじめすべての人びとから迫害され見捨てられたハートフリーを、最後に幸福にしてやるための最も重要な人物に仕立てられていることは間違いない。最後の大団円は、かかる判事の出現という、他力的な契機によって招致される。このような判事の出現は、フィールディング自身、のちに、

かかるすぐれた治安判事になったから、これは彼の社会的理想の反映であろうが、これが、ハートフリーの悲劇的結末を、幸福な結末に変える重要な要因の一つとなっているところに、この小説の人為的操作が見てとられる。これはアーノルド・ケトル (Arnold Kettle) が「フィールディングの父子的温情主義 (paternalism)」と呼んでいるもので、彼は、この小説を高く評価しつつも、この判事の出現をこの物語の弱点の一つと見なして、こんな風に述べている。^⑩

主人公のハートフリーは、ジョナサン・ワイルドを打ち負かすにはあまりにも弱い。しかしジョナサンは打ち負かされねばならない。それだから、一つの新しい力——「機械仕掛けの神」(Gens ex machine) である、啓発的で賢明で、この小説がかくも容赦なく暴露している国家を超越している、「あの善良な治安判事」が、この書物に導入される。そして、この判事がうまく物事を正し、ハートフリーを救い、ワイルドを絞首台に送るのである。

かくて、この小説は、「完全にリアリスティックな傑作」となることができなかった、とケトルは考えている。この見解は注目に値する、と私は思う。この「善良な治安判事」を「機械仕掛けの神」と見なしているのはケトルばかりではなく、エリザベス・ジェンキンズもまた、彼を「機械仕掛けの神」と呼んでいる。^⑪このような治安判事の出現は、絶対に考えられないことではないから、彼を「機械仕掛けの神」ときめつけることは苛酷だと云う人があるかも知れないが、しかし、この判事が、この小説の中で、「機械仕掛けの神」的役割をおびて現われていることはたしかである。敗北すべき善良な人間を勝利と幸福に導くためのかかる人為的仕組の導入は、すでに「Joseph Andrews について」(『英国小説研究』第三、四、五冊)のなかで述べたように、フィールディングのすべての小説中に見出されるものである——それは、あとで記すように、フィールディングの小説の弱点である

と同時に、善良な人間が幸福になる社会を夢見る彼の栄光でもあるのだが。

次にハートフリー一家が物質的幸福を得る契機、失われた宝石が手に戻るばかりでなく、高価なダイヤモンドを手する事情に移ろう。これは、この小説中の最大の欠点とも云うべき最も弱い部分——ハートフリー夫人の冒険旅行——と結びついているから、まず、この部分を検討して見なくてはならない。この冒険談は第四巻の七八、九、十一章を占め、すでに記された、ワイルドがフランス私掠船の船長によってボートに乗せられ、海上に追放された事件のあとから始まる。それを簡単に記すと——

このフランス私掠船の船長は、夫人に恋心を抱きながらも、彼女を親切にもてなす。二日間、完全な風であつたが、ダンケルク (Dunkirk) の見える頃、フランス船に会い、その船の誘いで、一緒にイギリス商船を追跡するが、途中、霧にさえぎられ、霧が上ると、そばにイギリス三級軍艦があり、この軍艦に降伏する。全員この軍艦に移され、彼女の宝石類も保管される(判事が取り戻してくれるのはこの軍艦からである)。このイギリス軍艦の艦長は、呑んだくれで野卑で乱暴な男で、彼女に乱暴をしようとするが、これを、同じくフランス私掠船からこの軍艦に移された一人の紳士(これは後に判明するように、例の伯爵なのである)が救ってくれる。そのため、この紳士は二日間、鎖につながれる。数日後、酒を呑んでいる艦長は、部屋に彼女を呼び、再び乱暴な振舞いにおよぶが、彼女は一計を案じ、彼を酔いつぶして逃げる。艦長は彼女を追いかけて、階段から落ちて大怪我をし、副長が艦長代理をつとめる。やがてコーク (Cork) 行きのイギリス船に会い、彼女と、彼女を救ってくれた紳士は、この船に移ることを許される (iv. 7)。

このイギリス二檣帆船は、アフリカ北西部沖にあるマデラ諸島 (the Madeiras) の沖合で、暴風雨に会い、難破する。彼女は、この時、例の紳士が案外、臆病なのに気づく。嵐は十一時間以上つづくが、嵐が止むと船は南東へ三十時間漂い、アフリカ大陸近くまで来る。が、また嵐が三日つづき、南に流され、陸地から一リーグほどになったとき嵐がやみ、全員

ボートに移って上陸するが船は沈んでしまい、船長以下涙を流してそれを惜しむ。上陸したのは正午で、それから五哩歩き、平原をこえ、森に出る。食糧をたべたのち、総勢十四人でこの森を横断することになり、日のくれるまで進み、一晩、樹の蔭で休む。例の紳士が護衛してくれるが、船員は粗野だが、乱暴はしない。翌日、町の見える方向に、疲れたからで進むことになる (iv. 8)。

彼女は疲れはていたので、船長たちに先に行ってもらい、後から例の紳士と行くことにするが、紳士は正体をあらわし彼女に云い寄り、きっぱり拒否されると、チョッキの裏を切開いて、いくつかの宝石を出し、これで彼女を釣ろうとする。その中にダイヤモンドの首飾りがあり、これを見て彼女は伯爵に詐取されたものであると気付き、この男が伯爵であることを知る。彼女は心を落ちつけ、船長たちが帰るまで待たせようとするが、彼は暴力に訴えようとする。あわやというとき、突然、茂みから半裸体の、銃を持つ異様な姿の男がとび出し、伯爵を倒す。この男は、いんぎんでフランス語で話しかけ、彼女を守ってあげる、と云う。彼女はどきもを抜かれながらも、伯爵が手から落した宝石箱をひろってポケットに入れる。伯爵をおき去りにして、彼女はこの男に案内され、男の住んでいる洞穴に入って、もてなしを受ける。この男は難破して、妻とこの海岸に漂着したが、妻に先立たれた隠者で、この国の王に時計をやり必要品を手に入れたことなどを話す。彼女は、この男に守られて眠り、一緒に町へ行ってくれと頼むと、彼はひざまずいて愛を告白する (iv. 9)。

(この時ワイルドがファイアブラッドとリティシアの情事の現場を見つけ、獄中で大騒ぎがおこる。)

隠者は、さかんに彼女に讃辞を呈し、だんだん、ひつつこくなってきたところへ、三人の船員が帰って来たので、彼女は、これ幸いとばかり、彼らと町へ行く。そして、この国の王に引合わされるが、王は使いをよこして、からだを楽しませてくれれば莫大な贈物をすると言ってくるが、彼女は断る。しかし王は、船長と彼女たちが、ドレイを運ぶイギリス船に乗ってアメリカを経てイギリスに戻る計画を立てたことを知ると、彼女を宮廷にゆんで、彼女の貞節にくらべれば、はるかに価値のないものだ、と云って、「とても立派な宝石」をくれる。彼女たちは上記のイギリス船に乗り、海上でイギリスに戻る軍艦に会い、これに移り、艦長の求愛をしりぞけて、グレイヴスエンド (Gravesend) に上陸し、そこから

ロンドンに着き、刑場に赴こうとしているハートフリーと再会したのである。彼女は、『神は早晚徳高く罪なき者に至福をあたえたもう』というのは、ほんとに真理ですね』と云って話を結び、夫に、『伯爵の奪った宝石類』と、アフリカの酋長から贈られた「非常に高価な宝石」を渡す(Ⅴ.Ⅱ)。

一七五四年版では、四三年版に含まれた、巨大な怪物などの見聞記とも云うべき一章がはぶかれ、四つの章に縮小されているものの、この冒険談は、『ジョナサン・ワイルド』の周辺(1)〔『英文学評論』第Ⅳ集〕でふれたように、すでに『ジョウゼフ・アンドルーズ』を書いたフィールディングの、およそ書きそうもない、非現実的な物語である。「序文」のなかで、フィールディングは、「途方もない旅行談へのバーレスクとして意図された一章」を除いては、自分は、蓋然性の規則を守っているつもりだ、という意味のことをのべているが、その一章と云うのは、五四年版で、はぶかれた章をさすものであるが、この冒険談のその他の部分も、この小説のリズムの一貫性を害っている、きわめて荒唐無稽な物語と云わねばならない。この部分は、ダドン教授の推定するように、フィールディングが、当時流行していた途方もない旅行物語や、貞淑な婦人が云い寄る男たちの誘惑を斥ける誇張されたロマンスのバーレスクやパロディとして、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の執筆と出版より前、一七四〇年頃に書いた古い草稿を、この『ジョナサン・ワイルド』中に利用したものであろうが、たしかに、この部分は、他の部分と完全に異質的であり、単純素朴で家庭的な婦人として描かれていたハートフリー夫人は、この部分で、才智にたけた機略に富む女性に変質され、また、非現実的な出来事が次々と起り、今までの物語のリアリスティックな調子はくずれ、この小説が最後のより上りに向っている時に、かかる冗漫な四章の挿入は読者の注意を傍へそらせるばかりでなく、この小説の小じんまりとした見事な均斎を害ねている。そればかりでは

ない。この不自然な冒険談は、この小説で最後にハートフリー一家が幸福となる結末に、大きなつながらを有しているがゆえに、たんにそれだけではすまなくなつて来る。この悲現実的な物語は、この小説を大団円で終らせる、重要な仕組みの一つとなつてゐるのである。この架空的な部分のなかに、ハートフリー一家に幸福をもたらす物質的基礎——詐取された宝石類の取り戻しと、新たな「非常に高価な」ダイヤモンドの獲得——を提供する契機が織り込まれてゐるのである。治安判事は、イギリス軍艦が帰国した際に、彼女が携えていた宝石類を取り戻してやり、ハートフリー夫人は、この冒険旅行中、伯爵の詐取した宝石類を無事に取り返すばかりか、アフリカの酋長から立派なダイヤモンドを贈られ、これによってハートフリーは、破産をまぬがれたうえに、充分な元手を残し、「儉約と勤勉によつて」一財産を作つて、彼らは「愛の一家」と呼ばれて仕合せにくらすことになる。逆に云えば、ハートフリーが十八世紀的な意味で、幸福な生活を獲得するには、すでに記した「機械仕掛けの神」的存在である「善良な治安判事」の出現と、この架空的な物語を必要としてゐるのである。ハートフリーの勝利と幸福は、この僥倖と云つてもいい、不安定で不自然な地盤の上にきづかれています。フィールディングは、主人公を幸福にするために、そのリアリズムを破壊するかかる非現実的な物語の挿入という人為的操作をも犯さざるをえなかつたと云える。

善良で勤勉な、このささやかな宝石商一家に、深い愛情と同情を寄せるフィールディングは、邪悪なワイルドのような連中を打ち負かし、彼らを幸福にしてやらねばならない。しかし、彼らは、おのれたちの力でそれをなしとげるには、善良であるがゆえに、あまりにも力弱い。それゆえ、かかる人びとの幸福を念願するフィールディングは、意識するとしなにかかわらず、この小説においても、かかる人為的要素の導入によつて、完全なリアリストになることをすててまで、そのヒューマニズムを實現させる。かくして、この、完全なリアリズムの

犠牲は、社会的良心に燃える、理想主義的なモラリストとしての彼の栄光に結びついているのである。

私は今まで色々の角度から、『ジョナサン・ワイルド』という作品にできるだけ密着しながら、この小説の特質を分析してきた。ジョナサン・ワイルドという大どろぼうの性格と生涯を基礎にし、ウォルポールを横目でにらみながら、典型的に「偉大な人間」とその世界をかくもあざやかに描き出し、「偉大さ」すなわち「邪悪さ」の本質を、かくも見事な諸諺と皮肉と諷刺のうちに、かくも辛辣に暴露嘲笑している小説は、十八世紀ばかりでなく、現在にいたるまでも、存在しないと言ってもいいのではなからうか。人びとの評価はいろいろである。スコット(Walter Scott)は、この小説の意図を理解せず、ダドン教授やクロス教授の記すところでは、コウルリッジ(Coleridge)は、「帽子について」の章を、スウィフトの『リリパット』(Lilliput)や『桶物語』(Atal of a Tub)の皮肉よりも高く評価した。②③ セインツベリ(George Saintsbury)は、これを『桶物語』に匹敵するものと見なし、④ ドブソン(Austin Dobson)は、この作品は、技量の点ではなく主題の点からみて、彼の他の三つの偉大な小説にすこし劣る、と考えている。⑤ たしかにこの小説は、諷刺的技術の点でスウィフトの壘を摩するものであるが、諷刺の内容と、その視点においては、スウィフトの作品と類を異にしており、彼自身の小説中でも、一風変った種類の作品であるが、大切なことは、彼のこの小説が今もなお生きているということである。ウォルター・アレン(Walter Allen)は、「フィールディングの作品は、彼の友人のホガース(Hogarth)のそれと共に、その時代の社会的良心の最も力強い芸術的表現であった」と述べ、『ジョナサン・ワイルド』について、「スウィフトのある頁は別として、それは、現在に至るまでの最も恐ろしい、そして最も輝やかしい散文の諷刺であり、おそらく、それは人間ぎらいの作品ではないがゆえに、スウィフトの作品よりもっと効果的であろう」と記し、『ジョナサン・ワイルド』は、その歴史を通じて、過去二十五年間の独裁者たちと全体主

義的政治のあいだほど、その効力を發揮したことはなかった」と云っている。⁽²⁾ この最後の部分は、この諷刺が現代においても生きていると信じている人があることを示している。現代ばかりではない。それは今もなお生きていることをこの小説を読み終えた人びとは自分の周囲の世界を見廻して感じるだろう。「征服者」「絶対君主」「政治家」「どろぼう」など、「高貴にして偉大な人間たち」の本質をあばいたこの社会的諷刺の小説は、常に迫害されてきた善良な庶民の側に立ち、人間的な怒りを心に蔵し、鋭い洞察力と豊かな想像力をもって「偉大さ」とその世界の実体をえぐり、その暴露と諷刺が真実痛烈であるがゆえに、それは二百年以上たった今日でも、なお、そのような人びととその世界を嘲笑してやまないものである。そして、ワイルドとハートフリーの葛藤を通して、それは、今もなお、人びとに、彼らの住む現実社会の汚辱にみちたひずみをつきつけ、その不合理を訴えつづけているのである。

〔註〕

- ⑭ M. P. Willocks, *A True-Born Englishman*, Chap. XVI.
- ⑮ James Sutherland, *English Satire*, Chap. V.
- ⑯ Elizabeth Jenkins, *Henry Fielding*, p. 47.
- ⑰ ホガース (William Hogarth) が、互に心よく思っていないなかったジョン・ワイルクス (John Wilkes) を描いたとき、それは肖像画とも戯画とも受取れるものであったが、ワイルクス自身、「おれは、毎日、だんだんホガースの画に似てくる」と云った (Austin Dobson, *William Hogarth*, Chap. VIII. Frederick Antal, *Hogarth*, Chap. VII.)。これがリアリズムというものであって、ワイルクスの言葉が、たとえ冗談をまじえたものであるにせよ、ホガースが、彼の特

徴を誇張たもつてうかた如実に描出したかを「オスカー・ワイルドの作品」。

- ④ M.P. Wilcocks, *op. cit.*, Chap. XVI.
- ⑤ Arnold Kettle, “The Progressive Tradition in British Culture,” *Essays on Socialist Realism and the British Cultural Tradition*. 総論の語句に「イブ」 An Introduction to the English Novel, Chap. II. に附記してある。
- ⑥ Elizabeth Jenkins, *op. cit.*, p. 49.
- ⑦ F. H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, Chap. XVII, (iv).
- ⑧ Sir Walter Scott, *The Lives of the Novelists*, “Henry Fielding”.
- ⑨ F. H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, Chap. XVIII, (vi).
- ⑩ W. L. Cross, *The History of Henry Fielding*, Vol. I. Chap. XIV.
- ⑪ George Sainsbury, *The English Novel*, Chap. III.
- ⑫ Austin Dobson, *Fielding*, Chap. IV.
- ⑬ Walter Allen, *The English Novel*, Chap. 2, (2).